

# 「スウェーデン女王蔵書一九二三番写本」 の筆者について

(Sur l'auteur du manuscrit "Biblioteca Apostolica  
Vaticana, Regim. Lat. 1923")

堀 越 孝 一

## 1

ヴァチカン図書館所蔵の「スウェーデン女王蔵書一九二三番写本<sup>(1)</sup>」は、かつて十六世紀後半、人文学者クロード・フォッシェの蔵書にあった。つぎに確認されるのはポール・ペトーの名で、エチエンヌ・パスキエが、ペトーの蔵書にあったこの写本を一部翻刻し、その編著『フランス研究』に納めたことが知られている。前後してクロード・デュビイ（一五九四年死去）も原本の抄本を作り、これがその孫ジャックの手を介してドゥニ

・ゴドフロワに紹介され、ゴドフロワは一六五三年、その編著『フランス王シャルル六世史』にそれをそのまま収録した。<sup>(2)</sup>

原本の方は、ポール・ペトーの息子アレクサンドルがスウェーデン王家に売却した蔵書のなかに入っていて、一時ストックホルムにあったが、やがてスウェーデン女王クリスチナが、二十八歳かそこらの若さで退位し、亡命の旅に出た折り、書画骨董を積んだ前の女王の荷馬車に、それが紛れ込んでいた。その荷馬車の馬の鼻面がまっすぐ南に向かい、ヨーロッパ半島を縦断して、イタリアはローマに向かったというのは、これはクリスチナが新教国の女王でありながら、カトリックに回宗した女性であったことを想えば、十分了解できることである。このばあい、荷馬車の荷はローマ法王への手土産ということで、これまた十分了解できることである。

小口に手垢がべったりついて、と、十九世紀末にこの小冊子を実地に見分したらしいアレクサンドル・テュティは書いているが、ということとはフォーシェをはじめ、この手書き本は何人も人の目に晒されたらしく、十八世紀初頭にラ・パール本と呼ばれる印刷本が作られた。この底本になったと目される写本が、デュピイ写本とともに、パリの国立図書館にあるが、その写本の筆跡と同じ筆跡の薄手の写本があって、その最後のページにこう注記があるという。

「この詩行は八一三、七六九番のリエージュの戦いと題された写本からとったものである。その写本はジャン・マシオのものであったが、次いでスウェーデン女王の所有するところとなり、いまはヴァチカン図書館にある<sup>(3)</sup>」。

ということとは、ラ・パール本の底本と考えられる写本自体がヴァチカン写本の十七世紀後半の時点での写し

であることがここに示唆されているということで、その筆生もまた、ヴァチカンの小冊子の小口をべったり手垢で汚した人のうちに算えられる。

十九世紀に入り、ナポレオン・フィバーに乗って、フランス史料集がいくつも作られた。問題のテキストも格好の材料と狙われて、ビュション編集史料集、ミショー、プージュラ共編のそれに収録されたが、これはじつのところ、両方ともラ・パール本の引き写しでしかなかった。<sup>(4)</sup>

パリの国立図書館にもうひとつ写本があつて、「この三四八〇番写本の提供するテキストこそは、原初の稿本にもっとも近いものであることは疑いを容れないところである」と、アレクサンドル・テュティはいきなり断案を下す。そのくせ、かれの校訂したテキストは「ローマとパリの写本によって出版されたバリ一市民の日記一四〇五〜一四四九」と題されている。<sup>(5)</sup>

わたしがいうのは、ローマとバリと、ヴァチカン写本の方を、なんのことはない、先に立てているではないか。揚げ足とりはやめにして、この「パリの国立図書館蔵フランス語本三四八〇番紙のフォリオ版」<sup>(6)</sup>だが、これは前半二六三葉までは十六世紀末の外交文書の写しであつて、第二六四葉から「日記」がはじまり、第四六四葉まで続く。ヴァチカン写本と同様「リエージュの戦い」と題された詩文ほか一編が先行していることからも、これもまたヴァチカン写本と無縁ではない。

しかし、ヴァチカン写本に欠落している、たとえば一四三八年度にかかわる、かなりの量の記事がこの写本に見えることなどから、これをヴァチカン写本の単なる写しとみることはできないのではないか。<sup>(7)</sup>

だいたい、ヴァチカン写本は十五世紀後半の筆跡のもののだが、「日記」の写本は、十六世紀、すでに

複数知られていたのではないか。というのは、ヴァチカン写本の第六十葉裏の下欄余白に、十六世紀の筆跡で Desunt 3 feuiliez（三葉、欠落している）と読める。前後の文脈から、欠落している紙葉には、モントロの謀殺事件のことが書かれていたのではないかと思われる。一四一九年、ブルゴーニュ侯ジャンがアルマニャック党によって謀殺された事件である。

それはそれでよいとして、わたしがいうのは、十六世紀の注記者は、どうして欠落分が三枚とわかったのか？ あてずっぽうか？ それも考えられる。別のテキストとの照合で、それを知ったか？ そう考えた方が無理<sup>(8)</sup>がない。けれども、もしその欠落部分をその目で見たというのなら、もうすこしなにか書き添えてもよかったのではないか？

第二十一葉裏下欄余白にも、同じ筆跡で Desunt feuiliez と書き込みがあり、こちらの方は枚数を指示していない。しかし、フォリオ第二十一葉から二十二葉にかけての文章のつながぐあいからみるに、これは何枚も<sup>(8)</sup>の欠落とはおもわれない。せいぜいが数行である。してみれば、十六世紀の注記者は、それほど頼りになるサブ・テキストをもっていたわけではないのではないか。

一四三八年度にかかわる欠落については、問題の注記者は書き込みの労をとってはいない。問題の箇所は第一六二葉裏から一六三葉裏にかけてだが、つながりぐあいはたしかにおかしい。おかしいはおかしいのだが、*semblablement et rendirent ces trois places*（またモンタルジスの人々も同様にし、こうして三箇所が帰順した）という文章は、前提になる文章を要求する。第一六二葉裏にそれが<sup>(9)</sup>ない。

しかし、この程度の不整合は、じつはここだけではないのであって、それよりも、わたしが興味深く思うのは、第一六三葉表第一行の書き出しの文字であって、Item と、これは記事のひとつのまとまりを指示する文字である。

ヴァチカン写本は、改行のほとんどない、いわばベタ書き、追込み筆記の体裁をみせていて、フォリオ表であれ裏であれ、その第一行冒頭に Item がくるのは、これはなにも文章規則でそうなるということではない。偶然のことであり、むしろ筆記者の勝手である。

わたしがいうのは、第一六二葉裏の最後の行は ne poves gens ne buyoient point levin（貧乏人は葡萄酒が一滴も飲めなかった）と一応まとまっていることだし、次の紙葉は Item ではじまっていることだし、十六世紀の注記者がうっかり読み過してしまった可能性があるということ、これがひとつ。

次に問題は、ヴァチカン写本にはもともとそれが入っていたか？ それとも、そもそも筆生自身、欠落に気付かなかったか？

なにしろ第一六二葉は、一応それ自体で納まり、第一六三葉は文章がそれ自体で立ち上がるのだから、なんとも挨拶のしようがない。しかし、これは案外重要なことではないかと思案される。

もともと入っていたとしたら、どうなるか？

パリ写本とヴァチカン写本のちがいがほとんどなくなる。

アレクサンドル・テュティは、パリ写本のヴァチカン写本に対する独自性を際立たせようと、パリ写本の原本になった写本ということをしきりに言い立てる。（それにしても、しかし、その情熱は、いったいどこか

ら来るのか？<sup>(10)</sup>しかし、もしも問題の欠落部分が、もともと、すくなくともパリ写本が作成された時点までは、ヴァチカン写本に備わっていたということになれば、パリ写本の原本なるイメージは幻となる。

もうひとつ、写本がある。エクス・アン・プロヴァンス市立図書館の所蔵で、テュテイの紹介によれば、問題の一四三八年度分にかかわる欠落分も含まれていて、第二九ページから一九六ページまで、一四一二年から二七年度分までのものは、十六世紀末に筆写されたものとみられるという。<sup>(11)</sup>

例の詩文からきちんとしていて、体裁はヴァチカン写本やパリ写本とおなじである。パリ写本から出たか、それともパリ写本の原本の写しか、とテュテイは胸をはずませているのだが、パリ写本の写しとみるには時間的幅がどうか。また、パリ写本の原本なるものが、すなわちヴァチカン写本であっていけないわけではないことは、以上、概略、ご案内したところである。

## 2

ともかく、十五世紀前半のパリに住んでいて、日記を書き残した男がいたはずだ。その日記の草稿そのものは無理だとしても、その草稿に一番近い写しがどこにあるはずだと、ただ力んでみたところではなかった。初源の原本なるものは、つねにかわらずわたしたちの夢だが、夢から覚めて、目の前にあるものは、フォリオ版の紙一八七枚を綴じた冊子であって、表紙はごくあたりまえの赤だという。<sup>(12)</sup>

しかも、この小冊子、第十一葉までは、なにやら「リエージュの戦い」などと題する詩文であって、第十二

葉表から、ようやく「日記」本文がはじまる。そうして、ずうっと第一八七葉までいって、九行で本文はおわる。

一行おいた感じで、左端から *prince puissant si bellig (belliqueux)* と書かれていて、その左肩に、小さな文字で *Amen* と読める。そうして、この文字群から離れて、三行分ほど下方の、中央から右寄りに *maciot* と読め、その周囲に花押ふうの走り書きが散見される。この写本の筆者マシオの署名である。*maciot* の文字を囲んで、人の顔のデッサンが見てとれて、これもマシオその人のいたずらであつたのか。

興味深いのは、*puissant si bellig*（強い、とても好戦的な）と批評されている、その *prince*（君侯？）はだれかということ、そのことを詮索するには、その直前に文字を並べている、「日記」最後の記事の内容を、まずご承知おきねがう必要がある。<sup>(13)</sup>

「また、シモン聖人とユダ聖人の祝日、サンマルタン・デシャンでたいそう見事な行列のことがあつた。ここ二百年間見られなかったほどの盛事であつて、なにしろノートルダムのお歴々が、大学の面々、パリの全教区の世話役たちを引き具して、グレーヴのサンジャンへ御聖体を拝受に出掛けたのであつて、裁判所の方々ほか、じつに五万人が付き従つたのであつて、通過する通りという通りは、御聖体の祝日のときのように飾られた。そうして、サンマルタン大通りのモービュエの水場のあたりには、たいそう見事な舞台が組まれていて、平和と戦争の物語が、いとも華麗に演じられていた。語るに長い話で、最後まで見ている人はいなかった。」

わたしがいうのは、もとよりこの記事は問題の *prince* を特定するものではないが、この記事がマシオ氏のペン先から問題の文言を引き出したとはいえる。すなわち *prince* は、だれかある特定の君侯を指すものでは

ない。上天の主を指示すると読む。

同時代の詩人フランソワ・ヴィヨンの雑詩第十一番「絞首されたものたちのバラッド、別名ヴィヨン墓碑銘」の返歌四行詩冒頭に、*prince Jesus qui sur tous a maistrise* と読める<sup>(14)</sup>。バラッドの返歌は、歌会の作法を踏まえて、*prince* と、冒頭に呼び掛ける形式をとる。その家の主、歌の選定者への挨拶という想い入れで、ここではそれが主イエスその人に指定されているわけで、マシオ氏の弄ぶ *prince* の言葉の響きは、なにか限りなくこのヴィヨンの詩語になじむ。

そうして、主よ、力満てるあなたは戦いを好む、と、これはもう見事な文明批評ではないか。

わたしはなにもいっていないことになる。もしやこの賓辞は、たとえばだしもの思い付くところ、最後のブルゴーニュ侯むこうみずのシャルルに対する批評ではあるまいか。強力なブルゴーニュ軍団とフランス王ルイに対する挑戦的な態度、*puissant* と *belliqueux*、このふたつがかくまでしっくり結び付いているケースは、そうざらにあるものではない。もしそうならば、マシオ氏の素姓、筆写の年代の見当がつくと、そんな予測を立てていたのだが、シャルルに対するかかる賓辞は、いまのところわたしはこれを同時代史料に見出していないのであって、とにかく詮索好きのテュティ氏も、この件については知らん顔である。

マシオ氏の素姓については見当つけかねるが、これが「日記」の筆者ではなく、筆写した人であったこと、これははっきりしている。いったいだれが、自分の日記の一番最後のページに、きちんと署名などするものか。

わたしが興味深く想うのは、「日記」ははたしてヴァチカン写本の第一八七葉裏で終わったのか？ わたし



がいうのは、「日記」の筆者がそこで筆を絶ったのかということ、マシオ氏は「日記」の原稿（文字通りの意味で！）を写したのか？ はたしてマシオ氏の写した稿本自体が、すでに写しであったのではなかったか？ 終わりと同様、始まりも問題で、いったい「日記」がヴァアカン写本の第十二葉表から始まったというのは本当なのか？ じつのところ、「日記」の文章群中、もっとも古い日付の文章は、第十三葉表の第一行から始まるのだが、わたしがいうのは、そのこともあるが、そのことだけではない。すなわち、第十二葉表裏の文章群の帰属の問題であって、ともかく、ご面倒でも、一度通してお読みいただく<sup>(15)</sup>。

「なにしろかれらはひどい目にあった。二万六千以上が死んだのであって、それは四百と八年の九月二十三日のことだったが、戦火絶えぬ間に、火に焼かれ、飢えに苦しみ、寒さに凍え、剣に倒されて、さらに一万四千人が死んだのだ。じつに四万である。続く十一月十六日、土曜日、前述の諸卿、すなわちナヴァール、ロイ等（？）は、王をトゥールに連れていった。民衆はそのことに大変当惑し、もしもブルゴーニュ侯がパリにいたならば、そうはさせなかったろうに、といった。しかし、かれらはそうしたのだ。王はそこやシャルトルに十七週間いた。そうして、パリの商人頭や町人たちが、何度もなんども呼ばれて出掛けていった。しかし、かれらにとっても、また民衆にとっても、得になることはなにも決まらなかった。続く三月九日、ブルゴーニュ侯が、貫頭を引き連れて戻ってきた。そうして同三月の十七日、日曜日、かれらは王をパリに連れてきた。王は、ここ二百年間、かつてみられなかったほどに敬意を払われて迎えられた。なにしろ夜警隊の警吏や商人組合のそれ、騎馬警吏に笞の警吏、また十二人組<sup>(16)</sup>、全員がそれぞれがうお仕着せと、とりわけ頭巾をつけていて、また、町人全員が王の前に進みでる。王に先行してラッパ吹き十二人に衆人多数。王の進む先々で、なん

とも喜ばしげなノエルの叫び声があがり、すみれやなにかの花々が王に投げかけられた。夜になって、路上の宴会が開かれて、みんな大層楽しそうにやっていて、いたるところで火が焚かれ、パリ中どこでも、金だらいで水をかけていた。そうして、その翌日、王妃と王太子がやってきて、前日と同じかそれ以上に、人々の喜びは大きかったのであって、なにしろ、はじめてパリにきたとき以来、王妃がこんなにも敬意を払われて入城するのは、かつて見られなかったほどだったのだ。続く六月二十六日、聖父が決まった。すなわちビエール・ド・カンディ。続く七月の月曜八日にパリで披露された。人々はいとも高雅にこれを祝った。王のトゥールからの帰還のときのことを前に書いたが、そんなふうだった。パリ中の僧堂が高らかに、また夜を徹して、鐘を打ち鳴らした。

注記 四百と十一年六月の最後の日、火曜、ポール聖人の祝日、正餐後の八時ごろ、雹が降り、風強く、雷鳴とどろき、稲妻が走った。その凄まじさたるや、およそこの世に生を受けたものの、かつて見たことのないほどのものであった。」

最初の記事はブルゴーニュ侯おそれしらずのジャンのリエージュ攻め関連のもので、一四〇八年九月二十三日、リエージュ近郊オテーの会戦のことが示唆されている。してみれば、なるほど第十一葉までの「リエージュの戦い」などと題された詩文とあい呼応していて、さてさてマシオ氏は、その詩文につなげて、*Dont il leur print mal……*（なにしろかれらはひどい目に会った）と「日記」の稿を起したのかと思わせる。

そうして、これに続けて同年十一月、翌一四〇九年三月、六月、七月と、記事の順序は時間の経過に素直に従っていて、なんの問題もないかと思わせる。ところがそこに、*Nota*（注記）と妙な頭注があって、一四一

一年の記事がぼつんとひとつ入り、あと、第十二葉裏は十七行だけで、あとは空白になっている。

第十二葉表の右肩に *iii. vii.* と書いてあって、四〇八、すなわち年記だが、左欄余白にも1408と書き込みがある。右肩の年記は、その筆跡が本文のそれと同じだが、左欄余白の年記は、これは後代の書き込みである。前者は、その後しばらく現れず、ようやく第五十五葉表の同じ位置に *iii. xviii.* (418) と読める。

第五十五葉表は、なにも一四一八年度の記事が始まるページではなく、筆記者の気持ちを付度すれば、その前ページ、第五十四葉裏の最後の行に、…… *le lundy xix jour de / septembre lan mil iii. xviii.* と書き、そこで文章を止め、数字分余して、紙を取り替えた。そこで、新しい紙の右肩に、心覚えにまず年記を入れたか。なにしろ前ページとひとつの文章でつながっていないのだから、あとで束ねるときの手掛かりにと、年記を入れたか。

そのことはどうでもよい。じつのところ、わたしの関心をそそるのは、むしろ左欄余白の年記の方であって、というのは、次の紙葉、第十三葉表の、これは上部余白中央に、おなじ筆跡で1408と読める。この位置、この筆跡の年記は、以後、紙葉裏表に必ず入る。ただし、どういうのか、最後のページ、第一八七葉裏には年記はない。

ところで、この第十三葉の年記、じつはこれはまちがいののである。

*Et environ dix ou doze jours apres furent changees / les serures et clefs des portes departis……*  
(そうして十日ないし十二日はどして、パリの諸門の錠前と鍵が取り替えられた……)と始まる第十三葉表冒頭の文章は、一四〇五年の出来事を伝えていて、その書き出しからして、これに先立つ文章を予想せしめる

が、それが無いという、「日記」中一番古い日付の記事なのである。

そうして、ずうっと読み進めて、第十三葉の裏ページの第十六行に *Lan mil iiii et ix lejour de lamyroust / fist tel tonnoyre……*と、いきなり一四〇九年の年記が見える。それから後は、大体素直に年を追って記述は進む。そこで問題の第十二葉裏表の文章群は、この記事の直前に入ると推量される。

「日記」の構成は、こうなろう。

ヴァチカン写本第十三葉表第一行から裏第十六行まで。これは一四〇五年の記事群である。次に第十二葉表第一行から裏第十二行まで。これは一四〇八年と九年七月までの記事群である。次いで第十三葉裏第十六行から後の文章。これは一四〇九年八月以後の記事である。第十二葉裏第十三行から第十七行までの文章は、第十五葉裏第十六行の後に入る。

第十三葉裏の途中、第十六行の後に第十二葉の文章群が入るといふ事態がすべてを語っている。それも、ただその行の後に入るといふのではない。第十六行の途中に切れ目があるのであって、してみれば、第十二葉の紙葉は、これはたまたま綴じ誤りで浮いてしまったといった体のものではない。マシオ氏がこれを書いたその段階で、第十三葉のたたずまいはすでにしてこうであったと推理せしめる。ということとは？

ということとは、マシオ氏は筆生である。職業にしていたかどうかは、皆目分らないが、それでは、かれが脇に置いていたその原稿は、それはどのような性質のものであったか。「日記」の草稿ではすでになく、その写しであったか。草稿ではあったが、整ったものではなく、すくなくともその頭の部分は断片化していて、再構成するのに骨が折れた。そうも考えられる。

3

マシオ氏が筆者でないならば、筆者はだれか。

ヴァチカン写本を一度剥げば、初源の原本が現れるとわたしたちは期待する。筆者も姿を現すと期待してよいであろうか。

これはじつは、からんだもののいいようで、わたしがいうのは、初源の原本はもちろんヴァチカン写本の中にあり、筆者もまた、ヴァチカン写本のなかにいる。ところが、テュテイ氏にせよ、今世紀に入ってテュテイ氏の本の焼き直しを作ったアンドレ・マリ氏にせよ、<sup>(17)</sup>そう見定めることにおいて覚悟のほどが足りなかった。

かれらは逆に、かれらの常識の指示する人間像を「日記」に読み込もうとし、片言隻語にその手掛かりを求める。「われわれ nous」の文字について、ことは兆候的であって、じつのところ、これは読み手三代とか、テュテイ、マリ両氏の問題にとどまらず、すでにしてクロード・フォーシェの眼鏡の曇りの問題でもあったのだ。

わたしのいうのは、とりわけ一四二七年と四六年のふたつの記事と、その欄外余白の書き込みのことであって、まずは前者の文章をお読みください。<sup>(18)</sup>

「この年は、四月から五月、もうあと三日か四日で五月も終わろうとするところになっても寒気ゆるまず、来

る遇も来る遇も水が張り、霜が降り、それにしじゅう雨だった。御昇天の祝日の前の月曜日、ノートルダムの一団とその随行の一団がモンマルトルに向出した。なにしろその日も、朝の九時ごろから正餐後の三時ごろまで、雨は降りやまなかったのだが、かれらは雨を嫌って、時間を空費したわけではなかった。なにしろモンマルトルからバリまで、道は泥々の状態で、われわれは、モンマルトルからサンラードルまで来るのに、たつぷり一時間かかったのだ。そこから行列は、サンローラン経由の道を取り、サンローランを出発したのが一時かそこら。雨足が一段と強まった。ちょうどその時刻に、摂政とその妻がサンマルタン門から町を出てやってきて、行列とすれちがったが、かれらは行列にまったく配慮しなかった。なにしろ行列の脇を早駆けに駆けぬけたものだから、行列の一行はよけることもできず、馬のひずめのはねあがる泥を全身もろにかぶってしまったのであって、聖遺物匣や行列のことを気にかけて、ほんのしばらくのあいだでも、馬の足を止めてやろうとは、だれもしなかったのだ。そんなぐあいでも、それでも急ぎに急いで行列はパリにもどったのだが、かれらがサンメリにたどりついたのは、かれこれ二時と三時のあいだだった。この日、摂政は、前述のようにブルゴニエ侯に会いに出掛けたのであって、この日は一四二七年五月二十六日であった。」

そうして、この記事に付したクロード・フォーシェの注記だが、第一〇五葉裏の右欄外余白に筆記された六行二十三文字のこの注記の、じつは最後の三文字がわたしには読めない。<sup>19)</sup>

「こう思われる、筆者は／団体に属していた／ノートルダム教会の／あるいは、いうところの（人のいうごとく）／姉妹（教会）の、そうして、じつに／（不明三文字）」

ノートルダム教会あるいはその姉妹教会の聖職者団の一員であった。あるいは「（不明三文字）」であったかも

しれない……そうフォーシェは注記していて、注目すべきはこの文章の造りそれ自体である。最後三文字が読めなくとも、べつに構わない。この記事に照らして、筆者はパリ司教座教会の聖職者団の一員であつたかもしれないとフォーシェが推理しているというのが肝心な点なのではない。逆である。「あるいは」以下を付け加えて、人文学者は、筆者はノートルダム教会の聖職者団の一員ではない可能性もあると示唆している。その点こそが眼目なのである。

ここで興味深いのは例のテュテイ氏の挙動であつて、かれは筆者はノートルダムの一員だと決めたかきり、もちろんそのことは、この記事に筆者自身証言しているところから明らかだし、人文学者フォーシェもつとにこの事実注目していたと、こう述べる。「……長官フォーシェ、かれはかれの本の余白に、次のような考察を記入している、著者はノートルダムの団体に属していたと思われる<sup>(20)</sup>」。

「あるいは」以下の文節は、あつさり無視されている。無視することで、「あるいは」などと気の弱いことだと十六世紀の大人文学者を叱りつける気配である。

一四四六年の記事はこうである。<sup>(21)</sup>

「また、この年、二十歳になるかならぬかの若い男がやってきた。パリ大学の僧侶こぞって証言するところ、自由七科に通曉していて、あらゆる楽器をこなし、歌を歌い歌を作ることにかけて余人の追従を許さず、絵を描き、飾り絵を制作することにかけて、パリはもとより、どの土地にもかれ以上の腕前のものはいなかった。また、戦争のことにかけて、かれ以上に腕の立つものではなく、一本の剣を両手でめざましく操って、匹敵するものの存在を許さず、なにしろ敵を認めるや、二十歩ないし二十四歩離れたところから、ひとつとびに襲

いかかつて、過たずこれを倒したのだ。また、かれは人文学と医学のメートルであり、法学のドクトゥール、教会法学のドクトゥール、神学のドクトゥールであつて、これは嘘ではない、かれはナヴール学寮において、われわれ、パリ大学の完全無欠な僧侶五十人余り、その他三千人を越す僧侶と討論したのだが、かれは投げかけられた問いのすべてに、声たからかに、みごとに答えたのであつて、じつさいこれは、その目で見たものでなければ信じられないほどの不思議であつた。また、かれは、大変巧みなラテン語を話し、ギリシャ語、ヘブライ語、カルデア語、アラビア語その他いろいろな言葉を話す。また、かれは正騎士であり、そうして、じつさい、百年間、飲みもせず食もせず眠りもせずに生きられる人がいたとしよう、それでも、この若者が完全に暗んじて知っている知識を学んで身につけることはできないであろう。たしかに、かれはわれわれを大変怖れさせた。なにしろかれは、およそ人間の自然が知ることのできないはずのことを知っていて、なにしろかれは聖教会の四人のドクトゥールたちをやりこめたのだ。すなわち、およそこの世に比肩するものを見出さないかれの知識をもつてである。そうしてわれわれが聖書に持つところでは（聖書の教えるところでは）、反キリストがキリスト教徒の父と、キリスト教徒を装う、だれもがそう信じているユダヤ女の母との姦通から生まれるであろう、反キリストは戦火渦巻くとき、悪魔から生まれるであろう、若者はこぞつて、あるいは男にあるいは女に、あるいは驕りの心から、あるいは贅沢の欲望から、衣服を変えるであろう、大領主たちに対する憎しみが増すであろう、かれらは細民に対して残忍このうえなくなるであろうから。また、かれの知識はすべて悪魔に出るものであるだろう、それなのにかれは、それがかれの本性から出たものと思ひこむであろう、かれは二十八歳のときまでキリスト教徒であるだろう、そうして、その年齢になると、かれの大変な知識を披



露すべく、この世の大領主たちのもとを訪れるであろう、そうして、そのものたちから大評判を獲ち取るべく、二十八歳の年にイェルサレムからやってくるであろう。そうして、神を信ぜぬユダヤ人たちは、かれの大変な知識を見聞するや、かれを信じ、これこそはかれらに約束された救主だといひ、かれを神と崇めるであろう。そこでかれはその弟子たちを世界各地に送り、ゴドとマゴドがかれにつき従つて、かれは三年と半、君臨し、三十二歳のとき、悪魔たちがかれを連れ去るであろう。そこで欺かれることとなるユダヤ人たちは、キリスト教の信仰に回宗するであろう。その後、エノクとエリが来るであろう。その後はすっかりキリスト教の世になり、そしてひとつの羊の群れ、ひとりの羊飼となるであろうといった聖人の福音が実証されるであろう、そうして、かれを崇めようとしないうので、かれが苦しめさせるであろう人々の血が、神に対して、復讐をと叫ぶであろう。すると、聖ミッシェルがやってきて、かれとその手先どもを深い地獄の沼に突き落とすであろう。以上述べたごとく、前述のドクトゥールたちは、くだんの男について語つたのである。その男はエスパニユからフランスに來た。ところが、じつさい、ダニエルと黙示録によれば、反キリストはカルデアのバビロンに生まれるはずなのだ。」

これに付したクロード・フォーシエの注記はこうである。

「筆者は教会人あるいはなにかの学部（22）のドクトゥール、すくなくとも長衣の人であつたと思われる。」

この注記は、第一八一葉裏の右欄外余白の第十六行目から二十行目にかかわる部分に記入されたものであつて、訳文では「これは嘘ではない、かれはナヴァール学寮において、われわれ、パリ大学の完全無欠な僧侶五十人余り、その他三千人を越す僧侶と討論したのだが、かれは投げかけられた問いすべてに、声たからかに、

みごとに答えたのであつて」の部分にあたる。

「わたしがいうのは、まさにこの文節に対応する注記において、大人文学者は、あくまでも慎重な構えをみせている。「教会人 *homme deglise*」、「なにかの学部ドクトゥール *docteur quelque faculte*」と、筆者の存在の可能態を検証しながら、「以上当たらずといえども、せめてはいえよう *pour le moins*」と、「長衣の人 *de robe longue*」とまでカテゴリーを拡大する。

いったい、フォーシェの心中を横切った不安はなんだったのか。むしろ、そう問いかけたい思いに駆られる。

だから、ここでも肝心な点は、大人文学者が「日記」の筆者本人の証言らしく読める文節に接して、眼光鋭くそれを指摘したといったようなことにあるのではない。逆である。大人文学者は、そのためらいがちな筆遣いのうちに、「日記」の筆者がパリ大学の関係者ではない可能性があることを示唆している。

わたしが不審に思うのは、いったいどうしてこの大人文学者の不安とためらいが、十九世紀の校訂者に伝わらなかったのか。

なにしろテュテイ氏は、筆者自身が自分はパリ大学の教授だと自己紹介している。そのことは指摘するまでもないが、ことのついでにといった調子で大人文学者の注記にも軽く触れ、問題は五十人のうちか三千人のうちかですと、大急ぎで、エキセントリックな話題を持ち込もうとする。<sup>(23)</sup>

テュテイ氏の筆者捜しのことはもうよい。十九世紀の実証主義的考証家が、なんともただけにやりかたで獲物を料理する仕方を開陳してくれていて、それはそれで勉強になるが、ただし、それはテュテイ氏という

精神それ自体に対する興味が掻き立てられるというだけのことである。「日記」はテュテイ氏の手からすりぬけて、ふたたびヴァチカンの図書館に眠る。

以前わたしは思い違いをしていたが、アンドレ・マリ氏は「日記」をむりやり目覚めさせたものではなかった。マリ氏は、テュテイ氏の刊本と、それ以前のラ・パール本の写しとを突き合わせて本を作っただけであつて、その本というのも、これは読み物に入る類のものである。そうして、なにやら筆者についていうには、なるほどテュテイ氏の仮説は、いまとなつては受け入れられまい。「このヘバリのブルジョワ」は、かれ自身みずから表明しているように、〈大学の僧侶〉のひとりであつたといふことだけで満足しなければならぬ<sup>(24)</sup>。」

なにも写本を見なければだめだとはいわない。テュテイ氏の刊本で十分なのである。これは立派な刊本である。いったい、この校訂者ならぬ編集者は、問題の記事をはたして読んだのか？ 編集者はきちんと読む。かれは編集者でさえもないのか？

マリ氏のことはもうよい。わたしがいうのは、どうぞご紹介したふたつの文章群をお読みいただきたい。そうしてご判断いただきたいわけで、筆者は、わたしはノートルダムの僧侶だ、大学の関係者だといつてはいないというのがわたしの意見である。

文章を読めば、そうとわかる。読解の鍵は、後者の終わりに近く置かれた文節「以上述べたごとく、前述のドクトゥールたちは、くだんの男について語つたのである」にあり、すなわち、「われわれ」を含む文節は伝聞の記述である。

「また、この年、二十歳になるかならぬかの若い男がやってきた」と、かれは記事を起こす。次いで単刀直

入に「パリ大学の僧侶こそって証言するところ」と、噂伝聞の記述に入る。伝聞の記述終わって、こう、大学の博士たちはその若者について語ったがと、かれはいささか懐疑的な姿勢を示す。若者はスペインからやってきたという。おかしいではないか。「ダニエルと黙示録によれば、反キリストはカルデアのバビロンに生まれるはずなのだ。」つまりこれは「日記」の筆者自身のコメントなのである。

わたしがいうのは、文章の組み立てのことである。前者の文章の組み立ても正確にこれと同じで、なるほど五月も終わりに近くなっても寒気ゆるまずと、なにやら天候の話題を始めにもってきて、ただの挨拶かと思えば、それがまた、後の話の伏線になっているというレトリックの腕の冴えを自慢している気配がないではないが、「御昇天の祝日の前の月曜日、ノートルダムの一団とその随行の一団がモンマルトルに向いた」の一節がきりりと文章を引き締めて、出来事を記述する。

そうして、肝心なことは、かれはかれ自身、その出来事に参加していなかったということである。かれは聞いた話を書き留める。かれらはなかなか帰ってこなかった。ようやく帰ってきたのをつかまえて、わけを聞いたら、なにも雨宿りをしていたわけではない。「なにしろ、モンマルトルからパリまで、道は泥々の状態で、われわれは……」と、「われわれ」を含む文節が、この文章、伝聞の記述であることを示す。

そうして、ずうっと聞いた話の転写が続いて、さて、転写の終わりはどこか。というのは、「……かれらがサンメリにたどりついたのは……」と、この文章、かれらがと、なにかストリートにものを持っている気配があつて、もしや「日記」の筆者はサンメリ教会堂の前あたりで、行列の一行を待ちうけていたのではあるまいか。

しかし、それはよい。むしろ気になるのは、最後の一行で、これがつまり筆者自身のコメントなのである。じつのところ、前述のようにというけれど、前述の記事はない。あるいは、なくなってしまったのかもしれない。それはよい。わたしがというのは文章の組み立てのことであって、文章の性質のことであって、一四二七年と四六年のふたつの記事の文章は同じ性質のものである。

#### 4

事は文体であって、あるいは語り口といおうか。「日記」の文章の読みは、筆者の語り口を真似るエクササイズでなければならない。あるいは、文法は「日記」の文章それ自体に内包されているといおうか。すなわち、文法を掘り起こすことが読むということである。読むことが文法を掘り起こすことである。

わたしがいうのは、かれはノートルダムのなにかの役僧ではなく、パリ大学のどこかの学部の教授でもない。そう「日記」に読めるということ、なにやら「日記」の筆者捜しは、消去法のモードをとるかの気配である。かれが何者でないか、ありえないかを知ることまた、かれは何者であるかを知る手掛かりとなる。

正攻法、消去法、そのどちらで迫るにしても、データは「日記」そのものに求めようと腹を据え、語り口自体が筆者の氏素姓を明かしてはいないか、片言隻語に筆者の存在証明が読みとれはしないかと、神経をとがらせる。そんなエクササイズをかなり続けてみたが、正直、まだ全体の景色は見えていない。

このエッセイの眼目は、さしあたりデュテイ以来の誤解を解くことにある。デュテイ以来というけれど、テ

ユティ氏の議論はとうてい批判に耐える体ではなく、テュテイ氏以後、マリ氏や、近くは渡辺一夫氏<sup>(25)</sup>の名前を無視するわけではないが、「日記」を批判的に、ということは学問的に解題した人は皆無であって、してみればテュテイ以来の誤解もなにもあったものではない。

わたしの印象では、テュテイ氏の段階で、「日記」の、いわば解題学は、いちはやく一頓座をきたしてしまつたのであって、わたしがいうのは、なるほど一頓挫をきたしたといいまわすのはいいすぎかもしれない。そんなにすごい勢いで、この件に関する考察が進められたというわけではないが、それでも、テュテイ氏以前、「日記」をどう読むか、筆者をどう捜すかを一所懸命考えながら、「日記」を読んでいた人がいたということで、すでにご紹介したように、それは大文学者クロード・フォッシュである。

わたしがいうのは、フォッシュに還れということで、「スウェーデン女王蔵書一九二三番写本」の欄外余白注記を丹念に読めということ、たとえば第四六葉裏のそれである。

一四一八年夏、ブルゴーニュ軍団がパリを制圧した。六月十二日の夜十一時ごろ、と、かれは克明に時刻まで指定している。

「……サンジェルマン門の方で警戒の叫びがあがった。ポルデル門の方からも聞こえた。そこでモーペール広場界隈の民衆が動きだし、次いでレアルやグレーヴの、橋のこちら側の人たちが、パリ中の人たちが上述の諸門めがけて駆けつけた……」<sup>(26)</sup>

ceulx de deca les pons (橋のこちら側の人たち) という「片言隻語」が、第四六葉裏の第一八行目に点灯していて、大文学者は、そのところの右欄外余白に慎重にこう記す。

「筆者は示している、（かれが）／住んでいることを、所に／パリの、人がヴィルと呼んでいる」<sup>(27)</sup>

かれは諸橋のこちら側、すなわちヴィルと呼ばれていた街区に住んでいたと大人文学者は読みとっていて、ヴィルとはすなわちセーヌ右岸の街区の総称であり、これをわたしは「下市（しもいち）」と訳したいとかねがね思っている。それはともかく、レアルとは市場、グレーヴとは市庁舎前広場の呼び名で、どちらも「下市」にある。サンジェルマン門は、これは「橋のむこう側」、セーヌ左岸の街区、わたしの用語では「上市（うわいち）」の西の門であり、そこから東の方に回りこんで東南に開く門がポルデル門、別名サンマルセル門であった。

もう一例、これは第二九葉裏、一四一四年初頭の記事だが、パリはアルマニャック党に押さえられている。ブルゴーニュ軍団はサンドニにあって、パリ奪回の機会を窺っている。アルマニャック党は諸門を閉ざして、守りを固める。

「……橋のこちら側ではサンタントワース門の他は開かれておらず、むこう側でもサンジャック門だけ。サンドニ門の守りはゴール卿、サンマルタン門はエタンブをさんざん苦しめたルイ・ブルドン、またベリ侯はタンブル門を守り、オルレアンはサンマルタン・デシャンにあり、これこそが連中の頭目格アルマニャックはアルトワ館にあり、アランソンはベエンニユにある。つまり、のこらず橋のこちら側にいたのであって……」<sup>(28)</sup>

第二九葉裏第八行から第十六行にかけて記述されたこの文章の最後の行の「のこらず橋のこちら側にいた」の文言に注記するかたちで、フォーシェは右欄外余白に書いていて、こう読める。

「筆者は、じつに望んでいる／示そうと、かれは住んでいたと／下市に」<sup>(29)</sup>

サンドニ、サンマルタン、タンブル諸門、サンマルタン・デシャン修道院、アルトワ館、ベエンニユ（ボヘミア）館、いずれもセーヌ右岸の街区にある。大人文学者は、一五六七年のパリの町の、どこか静かな部屋のなかにでも座って、このあたりの文章を目で追いつながら、そこに読みとれる門とか通りとか館とかの名前を、脳裡に浮かぶ街の景観のなかにたずねる。

このばあい、一五六七年と、なぜ言挙げするののかといえ、第一四七葉表の左欄外余白に、やはり大人文学者の、こんな注記を読むからである。

「それに似た風／一五六七年の／月曜、火曜、水曜／七月十四、十五、十六日／また、九月七日日曜日<sup>(30)</sup>の」これはつまり、一四三四年十月七日の夜、パリ盆地に吹き荒れた大風のことを記述している文章に付した注記であって、フォーシェは、かれ自身体験した大風にこれを引き較べている。それはそれでよいのだが、注目すべきは、このばあい、過去の他人の経験を、現在の自分の体験に照らして追体験する、そのことの不思議に感動してのあまりか、さすがの大人文学者も注記の機会を逸しているのだが、この記事には見逃すことのできない文言が読める。<sup>(31)</sup>

「わたしの家のそばの古びたサル（建物）」

「誓っているが、わたしはそれをわたしの目で見ただけであって、こんなことはいままで見ることがなかったのであって、もしもこの目で見なかったならば、人のいうことなど信じはしなかったろう。」

なにしろよほど古びた建物であつたらしく、風はその建物の大梁を持ちあげて、長さ四トワーズ、つまり八メートルほどあつたというそれを、十メートルから十二メートルは離れている庭先の塀の上に運んだとい



う。「両端をそれぞれの側の塀の上にのっけて、いささかも塀を傷つけることなく、あたかも二十人の男たちが、できるだけそうと置いたかのようにあつて」、とかれはすっかり感動している。

その建物というのは、どうやら石材置場であつたらしい。ひとつひとつがぶどう酒の樽ほどの重さの（カク樽と書いているから、ほぼ六十リットルの重さ）、差し渡し十四ピエもあるという長大な（四メートル強）切り石を三つまでも、風は隣家の庭まで吹き飛ばしたとかれは書いていて、かれはそれを見た。

だから、なるほどかれは、そのとき、そこにいた。この存在証明はたしかである。なるほど、それがどこか。石材置場の近所のかれの家は、かれの家のそばの石材置場はどこにあつたか？ ロケーションはいぜんあいまいな気配だが、それでもかなり見通しはよくなった。「日記」の筆者はノートルダムスの僧侶ではなく、パリ大学に縁はなく、右岸の「下市」の、どこか石材置場の近所にすんでいた男と、そのところまでは限定できた。

(1) Biblioteca Apostolica Vaticana, Reg. Lat. (us). 1923

(2) このあたりの消息については、後注で紹介するアレクサンドル・テュティイの「日記」校訂本の序文に詳しい。いずれも未見だが、パスキエの『フランス研究』は Étienne Pasquier: Des Recherches de la France; Livres I-VI, 1596. コレノロワの『フランス王シャルル六世史』は Denis Godefroy: Histoire de Charles VI, roy de France; Recueil des historiens; 1653. クロード・デュビイの作成した抄本は、現在パリの国立図書館であり、すなわち

Bibliothèque nationale, collection Dupuy, no. 275. Mémoires pour l'histoire du roi Charles VI. じやう。

(3) ラ・バル本の底本にかかわる筆生の注記は、テュタイがその序文に紹介している。ラ・バル本は未見であるが、テュタイによれば「アカデシシアン」後注の「シシヨール・ブーシヤラ本の「前書き」の紹介によれば「ディジョンの「聖職者」ラ・バル氏による刊本である。La Barre, dans Mémoires pour servir à l'histoire de France et de Bourgogne; 1729.

(4) ヴァンモン本は未見。『シシヨール・ブーシヤラ本』の『Journal d'un bourgeois de Paris sous Charles VI et Charles VII; Michaud et Poujoulat, ed., Nouvelle Collection des Mémoires relatifs à l'histoire de France, vol. II et III; Didier, à Paris; 1854.

(5) Journal d'un bourgeois de Paris 1405-1449 publié d'après les manuscrits de Rome et de Paris par Alexander Tuetey; à Paris, Chez H. Champion; 1881.

(6) Bibliothèque nationale, fonds français, no. 3480. In-folio sur papier, reliure moderne. Mémoires de Paris soubz Charles VI et VIIe du nom.

(7) わたしはこのパリ写本は見ているが、批判的とはいえないが、テュタイの校訂本を見るかぎり、一四三八年度分にかかわるヴァンカン写本の欠落部分は、およそ百二十行、一行十二語平均と押さえて一千四百四十語にわたっている。もし item ごとく「記事」を区切ることができるとすれば(事実テュタイ氏はそうしている)、そのテュタイ氏の勘定によれば、第七十三号記事の途中から第七十五号記事まで、二十記事分である。なお本文後出を参照のしむ。

(8) 問題の記事は一四二二年のものとつづいて、フォリオ第二十一葉裏にかかわる部分は、En ce temps furent pluis (pluseurs)/commus (communes) come devis (de Paris) derouin etdepluis (et de plusieurs) auts (autres) boes (bonnes) villes. (Folio 21v, l. 30~31) 「このころ、パリやローマなど多くの町々、その他多くの善政なる町々……」第二十一葉表冒頭の文章は、devant eulx et gaignerent tantost laville et moult tueret (tuèrent)/degens duplain pais que tous se rebellerent en tout lepais/debeause car ilz avoient tant depaine etdecharge de/ gens darmes quilz ne savoient ausquelz obeir si se/tindrent aux arminaz qui la estoient les plus fors/pour letemps que lamalle guerre comensa et quant/lesd (lesdites) communes vindrent adreux ilz

les trouverent si/ rebelles quilz les tuarent tous et les faulx traistres/ armanaz gens darmes qui les devoient secourir/ sen fouirent au chasteil deiaid (de la die) ville et laisserent/ tuer les pauvres gens…… (Folio 22r. 1. 1~11) 「かれらの前に、そうして（かれらは）いちはやく（あるいは）町を占領し、野良の衆を大勢殺したので、ボース地方の人々全員が反逆したのであって、なにしろさんざん迷惑をこうむったし、負担に耐えかねて、かれらには服従する気にはなれず、この不幸な戦争が始まったころ一番強かったアルマニャック党と組んだのだ。さて、くだんのコミュニケーション軍はドウルーに到着し、（そこの住民の）叛意盛んと見て、これを全員殺した。これを救うべきアルマニャック党の軍勢、この裏切者どもは、町の皆に逃げ込み、哀れな町の人たちを殺されるがまに見捨てたのだ……」

(9) Et pour les courees/ que lesdi (ledits) larrons faisoient enchery tant pain/ et vin que pou degens mengeoient depain 1er saoul (tout leur saoul)/ ne pouvres gens ne buvoient point levin (Folio 162v. 1. 28~31) Item ceulx demontargis firent semblablement et rendirent/ ces trois places…… (Folio 163r. 1. 1~2) 「そして、くだんの盗賊団の度重なる掠奪のせいで、パンと葡萄酒がむやみに高くなり、腹一杯パンを食べるなんていうていできなくなつたし、貧乏人は葡萄酒が一滴も飲めなくなつた。」（フォリオ第一六二葉裏第二八~三一行）「また、モントアルジスの人々も同様にし、こうして三箇所が帰順した。」（フォリオ第一六三葉表第一~二行）

(10) 序文、*Prologue* わたしが心配するのは、よもやこの十九世紀の実証主義史家は、ヴァチカン写本よりもバリ写本の方を先に立てたいという、なんとも無邪気な、そうしてなんとも不気味な愛国主義に囚われてはいなかったか？ まさかとは思いたい……

(11) 序文、*Prologue* わたしはこれも見ていない。

(12) ヴァチカン写本は、マイクロフィルムから起こしたファクシミレのかたちで、わたしの手元にある。原本を見る機会はまだ得ていない。ヴァチカン写本の寸法についての情報はない。ファクシミレの寸法は、ほぼ 280×200mm である。羊皮紙は知らず、およそ中世写本の「紙の」フォリオ版の寸法は高 290~310、幅 190~210 のうちにあるという数字がある (Carla Bozzolo et Ezio Ornatò: Pour une histoire du livre manuscrit au Moyen Age; Trois essais de codicologie quantitative; CNRS, Paris; 1980; p. 130)。わたしは富士ゼロックス・システムセンターにファクシミレの作成を依頼したが、その際、とりわけて寸法の注文はつけなかった。はからずも原本寸法の複製が得られたと考

スウェーデン女王蔵書1923番写本

(31) Item le jour saint simon/et saint jude fut faicte l'aplustelle press (procession)/asaint martin des-champs que on eust vene/puis cent ans devant car ceulx de nosdame/acompaignez de toute universite et de toutes/les proisses (paroisses) departis et allerent guerre/leprecieulx corps nostr (Nostre Seigneur) ast jehan engve (à Saint Jean en Grève)/accompaignez de bien l mil psonnes (personnes) tant de parlement que dautres et pny (parmy) les rues/ou ilz passèrent les firent encourtinez come/lejour du saint sacrement Et fut fait en/en (sic) lagrant rue saint martin devant la/fontaine maubue ou pres ung moult bel/eschaffaut ou on fist une tsbelle (très belle) histoire/depaix et deguerre qui longue chose soit (seroit, par Tueley ?)/aracompter que pource on delaisa (Foliot 187r. l. 26~32 et 187v. l. 1~9)

(32) Le lais Villon et les poèmes variés édités par Jean Rychner et Albert Henry; I textes; Librairie Droz. Genève; p. 67

(25) Dont il leur prent mal car il en mourut l'aplust de xxvi mil et fut le xxiii<sup>e</sup> jour de septembre/cccc et huit et en tant que la guerre dura/par feu p (par) fain par froit alespes (à l'épée) plus de xliiii<sup>e</sup>; or sont biens quarante mil. Le xvii<sup>e</sup> jour de/novembre ens. (ensuivant) a ung samedi les devandiz/signeurs cestassavoir navarre (Navarre) loys (Louis) ?? emeneret (emmenèrent)/le roy atours (à Tours) dont lepeuple fut moult trouble et/disoient biens que ce (si) leduc dedourg. (de Bourgogne) eust ?? icy/quilz ne leussent pas fait ainsi leffrent et/la fut que la q (que) achartres (à Chartre) xvi sepm (semaines) et par /plusieurs foyz yfut leprevost desmarchans/et des bourgeois departis (de Paris) qui yfurent mandez/et si ny arreteteret (arrêterent) onques preu pour eulx/ne pour lepeuple. Le neuviesme jour de/mars ens. (ensuivant) revint leduc debourge (de Bourgogne) atout noble/gens et le xvii<sup>e</sup> jour dud. (dudit) moys de mars/aung (à un) dymenche amenerent le roy aparis (à Paris) qui/fut receu le tresplushonorablement quon vit/passe a deux cens ans car tous lessergens/comme duguet ceulx delamarchandise/ceulx acheval ceulx averge ceulx de la/xii<sup>e</sup> avoient diverses livres toutes espalment (spécialement)/dechapperons et

tous les bourg. (bourgeois) allerent/alencout (à l'encontre) delui devant lui avoit xii trompette/et grand fouseon menestrees et ptout (partout) ou il/passoit on crioit tres joiusement novel et/gecstoit on vio-  
llettes et fleurs sur lui et au/soir soupioient les gens en my les rues par/tresioyense chere et firent feus tout  
ptout/paris et bassynoient debassins tout parmy paris. Et le lendemain vint la royne et le dauphin si/refust  
la joie si tres grande comme le jour de devant/ou plus car l'aroyne vint leplushonorablement/quon layoit  
onques veue entrer apis (à Paris) depuis/quelle vint lapremiere foy. Le xxvii<sup>e</sup> jour/de juing ens. (ensui-  
vant) fut fait le saint pere cestassavoir/pierre de candye. Et le lundì viiii<sup>e</sup> jour de juit (juillet)/ensuivant  
fut scenu aparis on en fist moult/noble feste comme quant le roy vint de tours/comme devant est dit. Et  
par tous les moustie/deparis on sonnoit moult fort et toute nuyt/aassi

Nota que le mardi darrain jour de juing iiie/et xi. jour de saint paul enviro (environ) huit heures/apres  
disner gresla venta tona.?? (separtit?) le/plus fort que homme qui adonc fust eust/onques veu.  
(Manuscrit de Vatican, Folio 12r. l. 1~31 et 12v. l. 1~17)

(16) 夜警隊 le guet 夜警隊 夜警隊の専任警吏と補助の夜警隊とを呼ばれる商人  
組合の夜警隊 le guet de la marchandise 構成をわづうだ。騎馬警吏は彼の警吏 ceux à cheval, ceux à verge  
は、奉行所 grand chatelet の警吏であって、騎馬と徒足にわかれ、前者はパリとその郊外地区を越えた範囲に檢察權  
限を及ぼして、後者はパリとその郊外地区が縄張りであった。総数二百二十。そこから奉行所警吏をオンスズマン  
ン onze vingt (11×20) と呼ぶ俗語が生じた。十二人組 le XII<sup>e</sup> は、奉行所の長である王のペリ代官 le prévôt du  
roi de Paris の總警隊の頭目である。

(17) Journal d'un bourgeois de Paris sous Charles VI et Charles VII; Préface et notes d'André Mary; Les  
hommes, les faits et les mœurs, Collection dirigé par Edmond Pilon; Jadis et Naguère; Chez Henri Jon-  
quères, Editeur à Paris; 1929.

(81) Item le moys d'avril et du moys de may jusques/environ iii ou iiij jours en lafin ne cessa de faire/  
tresgrand froit et ne fut guere sepmaine qu'il ne/gelast ou grelast tresfort et toujours plouvoit/Et lelundì

devant l'ascension laprocession (la procession) de notda (Notre Dame)/et sacompaignie furent amontmart (à Montmartre) et ce jour/ne cessa deplouvoir depuis environ ix heurs/au matin jusques a troys heures apres disner/non pas quilz se musassent pour lapluye,/mais pour c tain (certain) les chemins furent si t f (très fort)/enfondres ent (entre) montmartre et paris que nous/mismes une heurs largement avenir de/montmart asainct ladre. Et de la vint/laprocession par saint laurens. Et andeptir (au départir)/de saint laurens il estoit environ une heur/ou plus lapluie sefforca plus fort que devant et/acelle heure sen alloit le Regent et safemme p (par)/laporte saint martin et encontrerent laprossion/dont ilz tindrent moult pou de compte car ilz/chevalchoient moult fort et ceulx delapross./ne porent Reculer si furent moult toulliez/delaboue que les piez des chevaux gectoient/par devant et darriere. Mais oncques ny/ot nul si gentil qui pour chasse ne pour pross (procession)/se daingnast ung pou arrester. Ainsi sen vint/aparis laprossion leplustost quelle pot et si fut/ent (entre) ii et iii heures quand ilz vindrent asainct/merry. A celui jour se pti (partit) le Regent pour aller/devers leduc debourge (de Bourgogne) come devant est dit/qui fut lexxvi jour de may lan mil cccc xxvii. (Manuscrit de Vatican, Folio 105v. l. 1~30)

(19) Il semble que l'auteur/fut de corps de/eglise nostre dame/ou come lon dit des/fillettes et mesme de (?) .....

(20) Tuetey, Journal, Introduction, p. xvij. ".....le président Fauchet qui inscrivit en marge de son volume la reflexion suivante: Il semble que l'auteur fut du corps de Nostre Dame."

(21) Item/en celluy an vint ung ?? jeune home qui navoit q (que)/vingt ans ou environ qui savoit tous les vii ars/liberaux par letesmoing detous les clerks de/luniversite de paris et si savoit jouer detoinstruments (de tous instruments)/chanter et deschanter mieulx que nul aut (autre) paindre/et enluminer mieulx que ??? (oncques?, par Tuetey) on sceust aparis ne/ailleurs. Item en fait deguerre nul plus appt (appert)/et jouoit dune espee adeux mains si m veilleust (merveilleusement)/que nul ne si comparast car qut (quant) il veoit son/ennemy il ne failloit point asaillir sur luy/xx ou xxxiii pas a ung sault. Item il est/maist en

ars maistre en medicine docteur en/loix docteur en decret docteur en theologie/et vraiment li a dispute  
 anous au colliege/de navarre qui estions plus de cinquante/des plus pfaiz (parfaits) clerks de luniversite  
 depis (de Paris) et plus/de iii mil aut s clerks et asi haultement bn (bien)/respondu atoutes les ques-  
 tions que on lui afates (a faites)/que cest une droite merveille acroire qui ne/lau<sup>o</sup>it veu Item il ple  
 (parle) latin trop subtil/grec. ebreu. caldicque. arabicque. et tous/aut s langaiges. Item il est chev (che-  
 valier) en armes/et vraiment se ung home pavoit vivre c ans/sans boire sans meng (menger) et sans  
 dormir il ne/auroit pas les sciences quil scet tout p (par) cueur/aprinses. Et pour c tain il no (nous) fist  
 t sgrant/feour car il set plus que ne puet savoir/nature humaine car il reprint tous les iiii/docteurs de  
 sainte eglise bref cest desa sapience/la non palle (pareille) chose du monde. Et no avons/en lescription  
 que ante c st (anté-Christ) sea (sera) engendre en advoutire/depere xpian (chrétien) et de mere juive qui  
 se faindra/xpianne et chun (chacun) cuidera quelle le soit il sera/ne dep (de par) ledeable en temps de  
 toutes guerres et q (que)/toutes jeunes gens s ont (seront) deguises dabit tant/femmes que hommes tant  
 p (par) orgueil tant p/luxure et s a (sera) grant hayne con les grans/signeurs pour ce quilz s ont tres-  
 cruelx au/menu peuple. Item toute sa science s a depar/ledyable et il cuidera quelle soit depar sa/  
 nature il s a xpian jusques a xxviii ans de/son aage et visitera en celui temps les grans sig(seigneurs)/  
 du monde pour monstrier sa grant sapience etpour avoir/grant renomee diceulx au xxviii an vendra de  
 jherlm (Jherusalem)/Et quant les juifs incredules verront sagnt (sa grande) sapience/ilz creront en luy et  
 diront que cest messias qui/pmis (promis) leur estoit et laoureront come dieu Adong/envoyera ses dis-  
 ciples par le monde et god et magod/le suyveront et regnera par iii ans et demy a xxxii/ans les dyables  
 lempporteront. Et adong les juifs/qui<sup>r</sup>auront este deceupz. ilz se convtiront (convertiront) alafoy/xpianne.  
 Et apres vendront enohc (Enoch) et helye (Helye)/Et apres s a (sera) tout xpian et sera leuvangille de s  
 t (saint)/qui dit et fiet unum oville et unus pastor adong/approuvee et le sang de ceulx quil aura fait tor.  
 (tormenter?, par Tuetey)/pour ce quilz ne vouldrent adourer crieria adieu/vengeance. Et adong vendra

- sainct michel qui/le trebuchera lui et touz ses ministres ou pions/puis denfer ainsi come devant est dit le raconterent les devant diz docteurs de celluy/home devant dit. Lequel est venu despaigne/enfrance Et pour vray selon danyel et lapoca (l'Apocalipce)/antecrist doit nestre en bablonie en caldee (Manuscrit de Vatican, Foliot. 181v. l. 2~33 et 182r. l. 1~32)
- (22) Il semble que laut (l'autheur)/ait este home de/glise (d'église) ou docteur (en?)/quelque faculte/pour le moins de/rode longue
- (23) Tuetey, Journal, Introduction, p. xxviiij et suiv.
- (24) Mary, Journal, Préface, p. 10
- (25) 渡辺一未氏の「日記」解題とつづきのなかの註釋が、あいまいながら前のものなど、わたしの註釋「古世ナチヤニキヤの註釋」(『史料雑誌』73~3, 4)「ナチニキヤ」をつづきながらだれだ。よほど古くは渡辺氏の註釋が「渡辺一未著 作集の『聖王・泰平の日記』(筑摩書房、一九七一年)と読める。
- (26) .....on cria alarme coe (comme)/on faisoit souvent alarme a laporte s germain/les auts (autres) croioient a laporte debordelles. Lors sesmut/lepeuple vers laplace maubert et environ puis/apres ceulx de deca les pons come des halles/etdegreve et detout paris et coururent vers/les portes dessds (dessusdites) (Foliot. 46v. l. 14~20)
- (27) Lautheur monstre (qu'il)/habitoit celle partie (de)/paris que lon dit la ville
- (28) .....et nulle de deca les pons/nestoit ouverte que celle de saint anthoine et/dela celle de saint jacques et estoit garde de/laporte saint denis leisir degaule et decelle de st/martin louys bourdon qui donna tant depeine a/estampes et leduc deberry gardoit le temple/orleans saint martin deschamps armiac/lostel d'arthoys qui estoit ledroit chief deulx/alencon behaigne brief tous estoient deca les pos (pons) .....(Foliot. 29v. l. 8~16)
- (29) Lautheur veut bien/monstrer quil habitoit/(en) la ville
- (30) Vent pareil a celuy/qui fut lan 1567/le lundi, mardi, mercredi/14, 15 et 16 de juillet/et le dimenche



7 septembre (Foliot. 147r.)

(31) ……une vieille salle ps/de ma maison…… (Foliot. 147r. l. 17~18)

……et je vous jure q/ce vy ge ames yeulx aussi bn qu oncques jevy/rien de ce monde ne je nen creusse  
homme/se veu ne leusse. (idem. l. 29~32)

……chascn(chacun) bout portant sur/lun des murs sans aucunement grever les murs/comme se xx hommes  
leussent assise leplus/doulcement que faire se peust…… (idem. l. 23~26)

(文学部 教授)